

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有  
〒207-0015  
東京都東大和市中央 1-539-15  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

# 東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

## 第128号

毎月発行

発行 2023年(令和5年)1月16日 月曜日

2023年(令和5年)1月16日 月曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、69歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の崎上映会は延期。乗っ取りのいえて4新制作に古も東北文化研究を掘すこと本を替えることを標榜。



### 【東北再興のための食品産業新分野の創出】第2回

## 米関連産業を再興することは可能か？ その② 「1日3食文化」の見直しと「米おやつ文化」の仕掛け

#### 新年号発行にあたって

昨年はさまざまな出来事が起きた一年だった。ひとつつ発生したら、それについてじっくりと落ち着いて整理するいとまもなく、また、すぐに別の「激動」が発生した。

また、ひとつひとつの「激動」を細かく思い出すことができないほどたくさんの方が起きた。

そのため、そうしたことがずつと続いていったという記憶しか残らない一年でもあった。

そして、一年を振り返ると、年の初めとはまったく異なる世界が、いま目の前にある。様変わりである。

あまりにも目まぐるしすぎたせいで、いまだに整理がつかない。

一年を通して、そんな出来事どもに追いまくられ、受け身一方で、積極的にそれらに働きかける余裕もなく、ただ耐えるしかない一年でもあった。

例えるならば、一方的に

打ちまくられる弱いボクサーのようなだった。そんな年はもうこりこりである。

そこで、新年号のトップ記事として、未来に明るい希望を抱けるような記事を取り上げることにした。

昨年の重苦しい気分をどこかへ吹き飛ばすような前向きで楽しい記事を提供したいと思う。

#### 反省：目先の「米粉対応」だけにとらわれない

当新聞の百二十五号と前号の百二十七号で、米問題を取り上げた。

今回の記事執筆にあたって、それらの記事をあらためて読み返してみた。

その読み返しの中で大いに反省したことがある。

それで、その反省を踏まえて、新年号である今回号も引き続き米問題を考えてみたいと思う。

少し長くなるが、その反省ポイントを以下にまとめてみる。

① 米産業再興の材料は「米粉」だけしかないのか？他にはないか？

② だらだらと減少を続ける米消費を少しでも改善しようとして「米粉」活用が目指しているのは分るが、改善策としてそこだけに特化するのには急務措置ではないか？

③ 東南アジアなどの海外の米活用に学ぶことは大事だが、そこだけに焦点をあてると、問題の本質からとんとんずれて行かないか？

④ 日本は先の戦争前からずっと米増産に励んで来た。特に東北は大いに努力して日本の米どころになって、ようやく需要に追いつくことに貢献できたと思つた数十年前から、米人気が下落し続けた。他方で、いまだに大規模農業を目指すような実質的な米増産政策が東北でも続いているが、これをどうすれば良いのか？

⑤ これまでの米増産政策から、いまさら米の大減産政策に百八十度切り替えることなど出来るのか？

⑥ ウクライナ侵攻から小麦価格が高騰し続けているが、それでも小麦は消費し続けなければならぬのか？もつと入手が容易で、安全で、安価な他の食材ではだめなのか？

⑦ 米イコール和食、小麦イコール洋食というイメージを破壊する新規の需要がないと根本的な解決策など出てこないのではないか？

⑧ そもそも近年の若者は朝食さえ採らないのが主流となってきた。米に限らず小麦の需要さえ伸びていないのはそれが原因ではないか？

⑨ 朝食抜きといった食事スタイルの変化にタイムリーに適応した米需要増大策が必要ではないか？



江戸時代の寿司はとにかくでかい！現代より2-3倍の大きさだった、たくさん食べるのではなく、2-3ケつまむ程度だった・・・日本食文化の醤油を知る - 江戸の食と暮らし- より



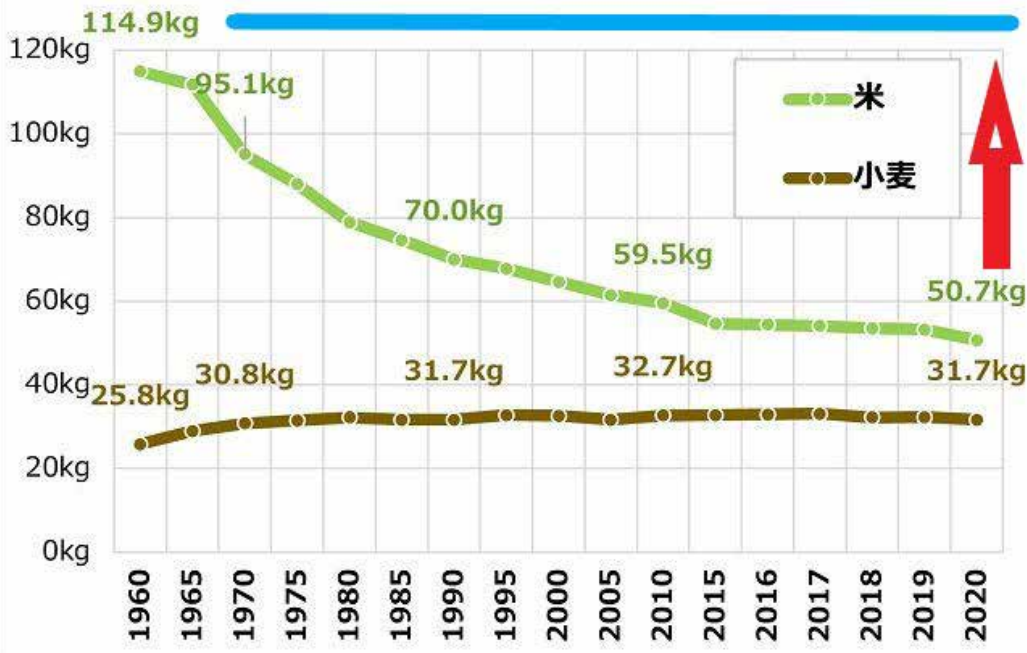
江戸時代の寿司はとにかくでかい！現代より2-3倍の大きさだった、たくさん食べるのではなく、2-3ケつまむ程度だった・・・日本食文化の醤油を知る - 江戸の食と暮らし- より

寿司屋台・・・江戸時代になると酢が普及し、箱につめた酢飯の上に魚介類を乗せて蓋をし重石を置いて数時間後に食べる「早ずし」が誕生。その後、お客様の前で新鮮なネタを即席でにぎる「にぎりずし」が登場します。このにぎりずしは、立売り屋台などでさかんに売られ、江戸の各町には1～2軒の寿司屋があったと言われています・・・刀剣ワールドより



### 米と麦の1人当たり年間消費量の推移

(国民1人・1年当たり供給純食料)



個人の米消費量を現在の2倍以上、年間120キログラムに引き上げる手立てはあるか？基礎資料：米と小麦の消費量推移グラフ・・・出典：農林水産省「令和2年度食料需給表」よりminorasu編集部作成

⑩ 結局、いったい、このシリーズで切り込んでいく焦点をどこに据えればよいのか？

### もっと大きな観念にシフト不可欠

こうして、「反省」を連ねていくと、どんな問題の深みにはまってくる。つき詰めると、反省のポイントは「その場しのぎの対策ではだめだ」ということになりそう。

するということに焦点を据えなければならぬ。いや、食事のあり方にまで突っ込んでいかないとダメではないか？ そうしないと、「応急措置」としてたえ成功したとしてもせいぜい二年程度しか効果がなく、再び行き詰ってしまうのではないか？

正直なところ、筆者はそんな思いにとらわれていて、收拾がつかなくなってしまうのである。 **「朝食抜きの文化」と「一日三食文化」** そんな状況を脱出するため、まず、まことに唐突な展開ではあるが、この国の食生活の歴史から、米問題に切り込んでいき、突破口を探りたいと思った。

そこで、現代の主流となりつつある朝食抜き文化が、単なる一時的な流行なのかどうかを歴史的に考察してみようと考えた。 また、同時並行的に、現在のこの国であたりまえのように行われている「一日三食文化」はいつ頃始まったかを併せて調べてみようと思ったのだ。

最初に「一日三食文化」を調べてみると、その歴史は意外に新しく、江戸元禄期以降ということらしい。今からおおよそ三百年五十年前以降ということになる。 それまではずっと「一日二食」だった。

江戸のまちを大火事から復興させるために全国から大工や左官屋などの職人が江戸に集結した。彼らは肉體労働を生業としていたので、「一日二食」ではお腹が空いて仕事にならない。そのため、朝は家で採り、昼には、仕事場近くの「屋戸」や「飯屋」で「中間食」を採り、家に帰って「夕食」を採るという「一日三食文化」になったという説。

この説も面白いが、不動とされていた日本の食文化スタイルの変化は、経済や産業の動向、災害、人口移動などに関係するというのはまことに興味深い。 **今後のスタイルは「朝食抜きおやつタイム」か** 現代だけしか見ないと、思考の幅が狭くなっていることにあらためて気づく。

筆者は、肉體労働をするわけでもないし、すでに毎日通勤するわけでもないのだからガッツリ食事をする必要がない。 お腹が空くのは、朝八時に起床してから三時間を過ぎて以降であり、ほぼ「昼食」である。 「夕ご飯」はしっかりと食べて、その間に、多少の「おやつ」を食べるのがすっかり定着した。

「おやつ」としての米 米単価は、厳選されることで上昇するだろうが、他方で、コメ消費量は減少していく。反比例の構造である。 **可能性は無限に拡大** 今回号は、「一日三食文化」や「おやつ文化」からいろいろ考えてみたが、もっと自由に発想したら、さまざまな米消費増の可能性がもっともつと出現するのではないだろうか。 次号に続く

### 「一日三食文化」は江戸元禄期以降に始まった

これが、「一日三食文化」に変わったのが江戸元禄期。その理由は諸説あるが、代表的なものは以下の三つ。 ① 千六百五十七年に起きた「明暦の大火」起源説

江戸のまちを大火事から復興させるために全国から大工や左官屋などの職人が江戸に集結した。彼らは肉體労働を生業としていたの

で、「一日二食」ではお腹が空いて仕事にならない。そのため、朝は家で採り、昼には、仕事場近くの「屋戸」や「飯屋」で「中間食」を採り、家に帰って「夕食」を採るという「一日三食文化」になったという説。

「おやつ」としての米 米単価は、厳選されることで上昇するだろうが、他方で、コメ消費量は減少していく。反比例の構造である。 **可能性は無限に拡大** 今回号は、「一日三食文化」や「おやつ文化」からいろいろ考えてみたが、もっと自由に発想したら、さまざまな米消費増の可能性がもっともつと出現するのではないだろうか。 次号に続く

### 米軽食としては「おにぎり」以外にもあるか？

日本人は「おにぎり」が大好きだ。近年、おにぎり専門店も増えてきた。 しかし、減少を続ける米消費を挽回する手段には程遠いのが現状だ。 こうした「おにぎり」のようなものを「米の軽食」と位置づけたい。

### 「菜種油普及」説

私ごとで恐縮だが、筆者の一日の食事スタイルは、「一日三食文化」になる前の江戸時代のスタイルに似ている。前述の歴史を調べてみて同じだったので少し驚いた。

### 米主食⇄米おやつ 主体文化へのシフト

再び、米需要の話に戻る。 まず、「主食」としての米食、すなわちいわゆる和食は残念ながら、これから

### 「おやつ」としての米

「おやつ」としての米素材活用には、米粒をそのまま活かしたレシピもありうるし、「米粉」を活用した「おやつ」も当然あるだろう。 さらに、今後、米粒でもなく、「米粉」でもない、新たなレシピも出現するかもしれない。

### 可能性は無限に拡大

今回号は、「一日三食文化」や「おやつ文化」からいろいろ考えてみたが、もっと自由に発想したら、さまざまな米消費増の可能性がもっともつと出現するのではないだろうか。 次号に続く



# 今年も東北のスポーツは躍進する！

春高バレー女子/古川学園(宮城)全国優勝おめでとう！  
今年3月開催のWBCに大谷選手出場・・・「優勝目指す！」  
大相撲/若隆景・若元春兄弟同時三役・・・史上3組目の快挙！  
釜石シーウェイブス今年1勝目 1部昇格目指して！



古川学園優勝の瞬間・・・サンスポ1/8

## 祝 優勝

全日本バレーボール高等学校選手権大会(8日、東京体育館)女子決勝で古川学園(宮城)が誠英(山口)をフルセットの末に下し、23大会ぶり4度目の優勝を果たした。第1セットを25-19で先取。その後は22-25、23-25で失ったが、第4セットを25-17で奪い返し、最終セットを15-6で制した。2大会連続決勝進出だったが、準優勝に終わった昨年の悔しさを晴らし、国体との2冠を達成した。



史上3組目の兄弟同時三役・・・若隆景(産経新聞)

WBC「侍ジャパン」の栗山英樹監督とともに記者会見に出席、3月開催のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)に向けて「野球を始めてから今日まで1位以外目指したことがない」と語った。



大谷選手/世界一を目指す宣言・・・ABEMA TIMES 1/6



史上3組目の兄弟同時三役・・・若元春(スポーツ報知)



44-22で勝利、マンオブザマッチのジョシュア・スタンダー



今年1勝目でサポーターにあいさつ



# 「聖地巡礼」の「聖地」を東北に

## 東北の「聖地」の現状

「聖地巡礼」という言葉をよく耳にするようになった。漫画やアニメや映画や小説などの熱心なファンが、その物語の舞台となるなどしてそれらの作品と縁がある土地を実際に訪れることを、宗教上の聖地への巡礼になぞらえてこう呼ぶようである。

「聖地巡礼」の東北における聖地の先駆けとしては、岩手県遠野市が挙げられると思う。言うまでもなく、柳田國男の「遠野物語」で民話の里として一躍知られるようになった地である。その物語世界に憧れて遠野を訪れる人は以来、ものすごい数になっていくはずである。同じ岩手では、宮沢賢治の出身地である花巻市も宮沢賢治ファンの聖地になっているし、太宰治のファンは青森県の五所川原市の旧金木町にある斜陽館が「聖地」となっている。

「聖地巡礼」の東北における聖地の先駆けとして

「山寺グラフィティ」のアプローチ

東北が舞台となった漫画

このネット上の「聖地巡

## 執筆者紹介

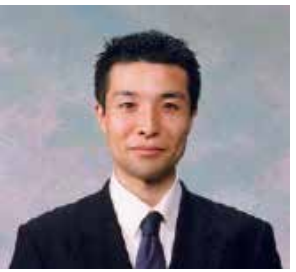
大友浩平

(おおもともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook  
https://www.facebook.com/kohchi.ootomo

ということでも自身が印象に残っているのは、藤子・F・不二雄の「山寺グラフィティ」という、わずか三六ページのSF(作者曰く「少し・不思議な」)短編作品である。この中で描かれる物語の中では、タイムトルの通り山形市にある山寺こと立石寺、並びにそこに古来伝わってきた風習が重要な意味を持っている。漫画の中では山寺の情景も描かれている。

「死んだはずの人が生きていく」という設定は、他の多くの物語の中でよく登場するものだが、この作品の中では、山寺の奥の院に伝わる仏教伝来以前からの風習として、死者の魂が死後も成長し続ける信じられてきて、その歳に応じたものを奉納するということが続けられてきたということが、物語の中で重要な鍵を握る。さらには死者のために結婚式までしてくれるということも。これは山寺に限らず、東北各地に伝わる風習である。

「おかえりモネ」の舞台となった宮城県気仙沼市と登米市、「あまちゃん」の舞台の岩手県久慈市、「エール」の舞台の福島市が広域で連携するプロジェクトで、都内に合同で運営するアンテナショップ「おかえり館」をオープンさせ、各地の特産品やドラマの関連グッズなどが買え、移住相談窓口も併設されているなど、一過性ではない内容が目を見張る。他にも合同で各地で物産や観光をPRするイベントを開催するなど積極的に活動していた。

このような「聖地」になったことをきっかけとして、人的交流の促進や地域産品の普及につながる取り組みはこれからも大いに試みるべきだと思ふ。

「聖地巡礼」においてアニメが特に盛り上がりつつあると先に書いたが、今後同様に盛り上がるのではないかと私が考えるのはゲームである。「聖地巡礼」という点で真っ先に思いつくのは「ポケモンGO」である。これはスマートフォン向けの位置情報ゲームであり、現実世界を歩くことで画面も動く。プレイヤーはポケモントレーナーとなって外を歩き回って画面の中の世界を探索し、ポケモンを捕獲したり育成したりバトルしたりするのである。

現実世界での行動とゲームの世界とが結びついていることで現実世界のイベントも行いやすい。「ポケモンGO」では、東日本大震災の被災地である岩手・宮城・福島三県でレアポケモンが大量発生するイベントを行うなど、さまざまなイベントが開催されて全国から多くの人が参加して賑わった。他にも、鳥取砂丘でイベントを行い、ゲームを観光資源として活用する鳥取県の事例があるなど、位置情報ゲームは地域活性化に結びつけやすい要素があると見える。

ポケモンにはそれ以外の取り組みもある。地域それぞれの「推しポケモン」が、各地の魅力や国内外に発信する活動を行う「ポケモンローカルActs」である。この取り組みによって多くの人がそれぞれの地域を訪れることで、地域とポケモン両方のファンが増えることを目指しているとのことである。

日本全国に「推しポケモン」がいるわけではないが、東北では「イシツブテ」が「いわて応援ポケモン」に、「ラプラス」が「みやぎ応援ポケモン」に、「ラッキィモン」が「ふくしま応援ポケモン」にそれぞれ任命された。これらは三県の推しポケモンはまさに震災からの復興の強い応援団となっている。これらのポケモンのファンにとっては三県はまさに「聖地」である。

この「ドラゴンクエストウォーク」でも最近リアルイベントを大阪で行ったのだが、そこにも全国各地から多くの人が訪れて大変な盛り上がりだったそうである。今年は東京でも開催するそうだが、ぜひ東北の地にも誘致したいものである。

位置情報ゲームに限らず、例えば「秋田・男鹿ミステリー案内凍える銀鈴花」や「北三陸殺人事件 秘境駅と謎の少女」といったゲームはまさに、それぞれのタイルにある地域がより直接的に「聖地」となっている。これらのゲームには現地の写真が多く取り込まれているので、ゲームをプレイした人の中には実際にこれらの地域に足を運んでみたいと考える人も相当数いるのではないかと思われる。

中には、二〇一一年一月に制作が発表されたゲームで、仙台市と宮城県石巻市にも作品中に過去に巨大地震と大津波によって多数の死者が出たという設定があったため、東日本大震災発災の直後に開発を凍結した一八禁恋愛アドベンチャーゲーム「アステリズム」の



# 東北にバランスをもたらず？ 最奥の理想郷土・南部の事

新年早々、私が本誌上でしつこい程に記してきた、「東北回帰」という四字熟語からあらためて始めたいと思う。東北に回帰する、その形はそれぞれであると思うが、私のように実際に首都圏から東北に帰ったとしてもそれで終わりでなく様々な方面での葛藤は続くのであるし、実際には故地を踏む事はない多くの人々にも、東北について考え、間接的に働きかけ、また外世界へ東北を伝えていく事が可能だろう。東北回帰に始まり、東北回帰に終わる―これからの全ての東北人にとって、多彩な東北回帰がその人生を豊かにしていく事を願うものである―などという堅苦しい前置



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

きは程々に、本稿では個人的な東北回帰を糸口に、これも蒸し返すようで恐縮ではあるが、その入口となった岩手県にまた別角度で迫ってみたいと思う。正月という事で和と古に想いを馳せ、「南部」としての岩手藩領としての東北のことなどを。

※

遠野に伝わる鹿踊りなどの郷土芸能、古代岩手地方を中心とする蝦夷の戦乱の歴史が、二〇代の東京かぶれした、元々強烈な「アンチ東北」であった私の心にある時期突如魅了してしま

った事―それが個人的な東北回帰の始まりであった話―は繰り返すまでもなく思う。只、岩手に強い愛着を抱きながらも実際には生活の利便性などを理由に隣県宮城に移住し、相変わらず憧れの地として岩手を遠望し続ける事になったのだが、これはつまり岩手に「ハマった」事で岩手一筋となるのではなく、むしろ岩手は東北全体の視野を獲得する

為の契機であり、自分の中で柱となる存在であったのだと思う事としたのである―それにしても、東北嫌いという私の長年の固定化した価値観を覆した岩手の魅力の秘密とは一体どこにあったのだろうか。

移住地を宮城県仙台市とした理由として実家のある

庄内へのアクセスの良さも魅力であった訳だが、庄内は同じ山形県の内陸地域とアイデンティティを異にしており、自分たちは山形人ではなく飽くまで庄内人である、という感覚がある。これは無論、徳川治世期三百年近くに渡る幕藩体制の強い影響によるものだがそれ故に宮城県の一県一藩の概念は新鮮であった。一方でその伊達藩領が北方にせり出して、現岩手県の南側―北上市から一関市までに当たる地域が南部領内ではなかった事にも驚いた。

庄内藩では、周囲の内陸の藩や新潟方面は勿論、戊辰戦争で刃を交わした秋田とすら元々仲が悪かったという話は聞かないが、南部藩においては北西の津軽、南の伊達とは決して友好的ではなかった印象がある。

庄内藩の場合、周囲から隔絶された地理的特徴があり、謂わば一地域にコンパクトに凝縮され、自己完結できるという性格があったのだと思われるが、南部の地はあまりにも広大でありまた周囲にも一筋縄ではいかない「曲者」が揃っていたと言え―即ち、津軽の大浦為信や、仙臺の伊達政宗である。だがそもそも、当の南部氏とはどういった一族で、その治めた地域とはどのような世界だったのだろうか。

元々、南部氏は甲斐源氏の一族で、源頼朝の奥州攻略に従軍した南部光行が、

軍功を立てた事で陸奥糠部(現・八戸市周辺)を拝領した事からその歴史が始まったとされる。伊達氏が元々現・福島県伊達市の拝領から苗字を地名由来に改めたのに対し、南部は甲斐国南部郷由来の苗字のままである(それ故東北北部なのに南部、というややこしい事になってしまうが)。

南部氏は南北朝(戦国期)に勢力を拡大し、東北北部をほとんど支配下に置くがその領域の広大故に一族支族間に亀裂を生じさせ、その領域の九戸政実の蜂起そして津軽における大浦為信の独立工作に隙を与える結果となるのであった。

九戸の叛乱は南部宗家の家督争いに端を発したものであったが、津軽の為信は何故南部からの独立を画策したのであるか？

津軽大浦氏の出自については、甲斐源氏の流れを汲む南部氏一族として記す系図が多くを占めるも、中には「津軽系図」のようにその遠祖を奥州藤原氏二代・基衡とその子、十三秀栄に定めるものもある。つまりこれが為信にも伝えられており、彼がその遠い出自を意識していたとすれば、津軽の反旗は鎌倉以来の侵略者一族である南部氏への意趣返しであり、独立は時代の越えた蝦夷の末裔としての悲願だったという事も考えられる―とは言え、南部氏の本拠となった現・盛岡地方を中心とした青森県東

部より岩手県北部にかけた地域から、蝦夷の風土が消え去っていたかと言え、恐らくそのような事はない―むしろ、ここ旧南部領ほど、蝦夷らしさを濃厚に伝えている地域はないようにも思えるのである。

この地域に特徴的な事として、特別に伝統的な事柄に関して多くが「南部」と頭に冠するという点が挙げられる。「南部鉄器」「南部煎餅」「南部嚙子」「南部杜氏」「南部馬」「南部曲がり家」そして「南部美人」と、恐らく津軽でも仙臺でも、それに庄内でもこれほどまでには主張しないだろうという、静かながらしいこいくらいの南部推しである。これによって、これらの地域では他地域以上に徳川時代までの藩体制の存在感を今に誇示し、古の文化を大切にす風土という明確なアピールにも一役買っていると言えよう。

しかし長年、微かながら感じてきた疑問もある。現在の、特に岩手県北部の文化は南部氏統治の所産なのか、それとも当地域を拝領した鎌倉武士や大名が他の氏族であったとしても同様の文化が伝えられたのかという事である。

南部鉄器、南部馬、そしてもしかすると南部杜氏や南部嚙子に至るまで、その素地は南部氏入部以前、恐らく蝦夷の時代には当地にあつたものではないかと思

われる。思うに「南部」と冠する事によって、本来公然とできぬ蝦夷の伝統をカモフラージュしてきた実態があるのではないか―そんな風にも、疑ってしまうのである。しかし、だからと言って、入部した武士団が南部氏でなくても同じだったかと言え、それも違うのではないかと考えてならない。

こちらにも飽くまで良い方へ取りたいとする想像に過ぎないが、南部氏のルーツである甲斐源氏と言え、後に武田信玄を輩出する一族であり、ある現地の人に言え、信州人は理屈っぽい一方、強烈な反骨精神を持つと言え。山また山の急峻な地形と小豪族が群雄割拠したであろう風土に鍛えられた彼らは遠く陸奥の地と恐らく相性も良く、むしろ緩やかな山容や穏やかな住民の気性に癒され、愛着を抱いたのかも知れない。

奥州におけるスターは政宗や為信のような曲者で、盛岡を拠点とした南部家からは強烈な傑物こそ出なかつたとしても、後にこのとく南部を冠した当地古来の文化を愚直に、かつ着実に継承したのである。そう考えれば、幕藩体制あつてこそ残された古代からの文化もあれば新しく生まれた文化もあり、逆に抹殺された文化もあつたかも知れないという事だろう。

例えば、旧南部藩領独自の文化のように思われがちな「鹿踊り」、つまりライ

オンを象ったと言われる大陸ルーツの所謂「獅子舞」とは異なる、土着系・北方系の郷土芸能は、実は山形県他秋田、宮城、福島と東北全土に形を変えて存在しており、この事は鹿踊りが個々の藩の中で生み出されたものではない事実を物語っているように思えてならない。

明治維新後、東北では文化・言語が異なる津軽・南部が青森県に、庄内と内陸地域が山形県に併合され、特に古来反目し合ってきた前者間では現代にまで至る困惑の反応が見られると言え。廃藩置県はそれまで各藩毎に培われた文化やアイデンティティに混乱を生じさせたと言えるだろう。

それでは、かつて蝦夷の国であったとされる東北の地が古代陸奥・奥羽に分割され、やがて平泉藤原氏により統一に近い形になったと思いきや、鎌倉武士団によって征服・裁断され、更に奥州管領、奥州探題の時代を経て幕藩体制に組み込まれるまでの間、人々のアイデンティティの分断や混乱はなかつたのだろうか？

こんな事を思った契機は前述の津軽為信による南部氏からの独立工作であった。現地奥州の古来からの文化を決して蔑ろにはしなかつたと思われ南部からの独立を、何故幾多の狡猾とも言える手段を用いてまで為信は執拗に独立を目指したのか―それは、津軽地方と南部地方が同じ蝦夷と呼べながらも、実は全く違う「民族」だったからではないのか―そんな仮説を立ててみたい。

『日本書紀』には東北の蝦夷は三種ある、と記される。「熟蝦夷」「荒蝦夷」そして「都加留(津軽)」である。これはよく言われるような、単なる政治的な区分けだったのであるか―だが、それならば荒蝦夷と津軽が区別されていたのは何故なのか。

恐らく、蝦夷の時代から後の津軽と南部の違いに相当するものは存在し、庄内と内陸の違いもあつたが、平泉藤原氏はそれらの違いを把握しながら上手く統一し運営したと想像される。

最終的に、現在の秋田地方で裏切られ、藤原氏は滅亡したとされるが、秋田の地で歴史上度々東北への裏切りと取れる(この時、津軽でも安藤次という人物による平泉に対する裏切り行為があつた)出来事があつたのも、根の部分では相容れない、別民族であるという事情があつた故なのかも知れない。

しかし、藩境で生じるのは酷薄な諍い事ばかりではない。岩手県北上市は元

来南部藩領と伊達藩領の接する地点であり、明治以降に形成された町である。言うまでもなく当地周辺は鬼剣舞や各種鹿踊りが密集する地域であり、その要因として両藩が北上川舟運中心に交流が盛んな上、軋轢や紛争の解決手段として領主らが民俗芸能を競わせたとする説がある。これには恐らく、元々当地方が同じ「荒蝦夷」に当たる民族であつたという事、政宗始め伊達藩主らの平泉文化に対するリスベクトなど特異な背景も関連していたように思われる。南部氏が拝領し、支配してきた広大な地は、時に周囲に裏切られ、翻弄されながらも、その内側は古より変わらずあまりに蝦夷的であり、あまりに魅力的でもあつたのである。津軽・秋田・仙台などの周辺を固める者たち、そして私のような庄内人が如何なる新たな時代の蝦夷となれるのか―今年も、未だ北に遠望しつつ、ささやかながら奮闘してみたいと思う。



昨年春先、八幡平方面から遠望した南部富士・岩手山





めがね橋と四季島



鉄橋渡るポケモントレイン



つらら

年が明けてほぼ半月経った。一年を占うにはまだ早すぎるが、今のところ、世界を驚かすような大きな事件や政変や戦争、大災害は起きていない。  
あるのは昨年からの「持ち越し」だけで、新たな変

動はないので少しだけほっとしたスタートである。  
くれぐれも、ジェットコースターのように目まぐるしく世界が変動した昨年とは違う年になることを心から願っている。  
冬は寒く、春にその寒さが

が緩み、暑い夏が来て、実りの秋が到来するあたりまえの四季の循環を願っている。  
世界の経済も政治も多少の問題を抱えつつも、穏やかに進行して欲しいと願う。

シリーズ 遠野の自然  
「遠野の小寒」  
遠野1000景より



冬の鳥居



風雪と石塔



夕日を受ける六角牛山



雪の華



つらら



## 【新シリーズ・三陸酒海鮮会】の開催ご報告と今後のお知らせ

第48回は12/17に開催、7名様のご参加、浦霞飲み比べがすごかった！  
第49回は1/21に、第50回は1/21に開催予定、3月以降は企画中

### 【基本方針】

- ① 会は原則として、月一回開催といたします
- ② 毎回会場を変えての少人数開催といたします。
- ③ 今後は、当面の間、毎回、「割り勘」を基本とした料金でお願いいたします。

第48回三陸酒海鮮会 新宿【樽一】篇では【浦霞】の飲み比べをして大いに盛り上がりました



生ガキ



発泡性  
純米吟醸

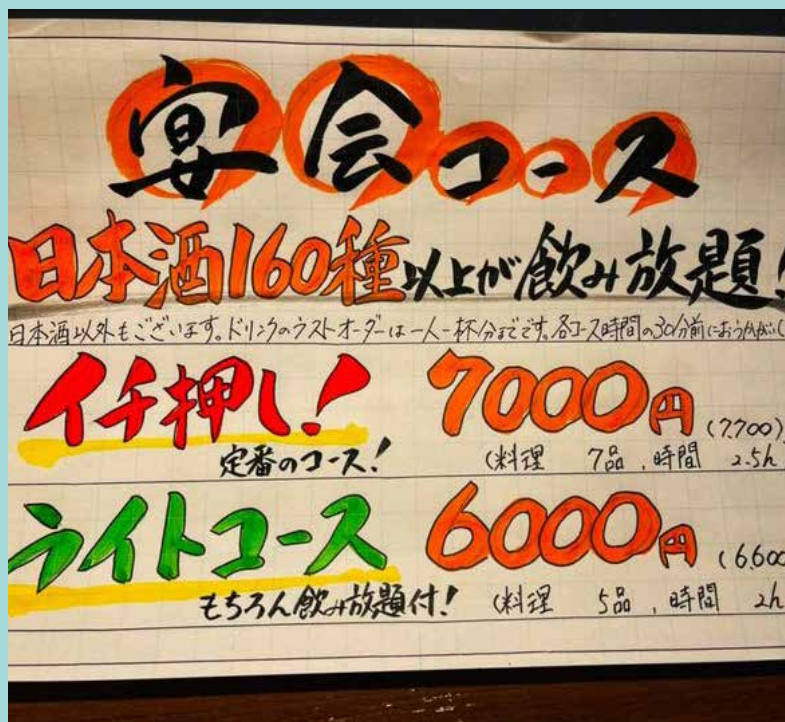


金ラベル 原酒



純米辛口

第49回三陸酒海鮮会 五反田【野崎屋】篇  
2023・1・21(土) 17:00～20:00



日本酒 160 種以上の飲み放題・・・チラシ

第50回三陸酒海鮮会 神田【飛梅】篇  
2022・2・18(土) 17:00～20:00



三陸産牡蠣食べくらべ・・・イメージ





写真でお伝えする  
東北の風景

**【東北の雪山】**

写真撮影 尾崎匠

